I.『コジ・ファン・トゥッテ』

コジ・ファン・トゥッテ、または恋人たちの学校
Cosi fan tutte, ossia la scuola degli amanti　K.588
２幕のオペラ・ブッファ

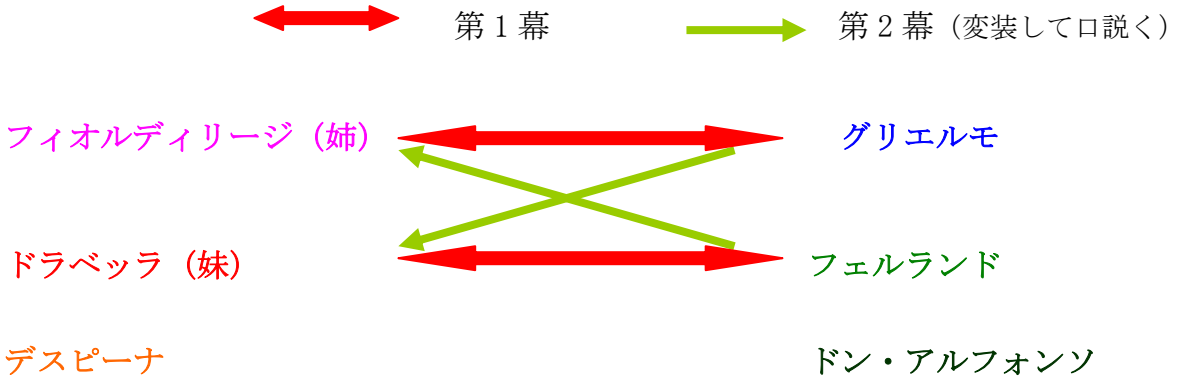
「コジ・ファン・トゥッテ」とは
「女はみんなこうしたもの」の意。［音楽中辞典］

１．登場人物とストーリー

あらすじ
18 世紀のナポリを舞台に、姉妹を許婚とする 2 人の士官が、女性の貞操を試そうと芝居を打つ。　[音楽中辞典]

登場人物
フィオルディリージ　・・・　ナポリに住むフェッラーラ出身の姉妹の姉　（ソプラノ）
ドラベッラ　・・・　フィオルディリージの妹　（ソプラノ）
グリエルモ　・・・　士官、フィオルディリージの恋人　（バリトン）
フェルランド　・・・　士官、ドラベッラの恋人　（テノール）
デスピーナ　・・・　姉妹の小間使い　（ソプラノ）
ドン・アルフォンソ　・・・　老哲学者　（バス）
[堀内修『モーツァルト　オペラのすべて』]

登場人物相関図



ストーリー

＜第１幕＞

士官のフェルランドとグリエルモは、二人の恋人であるフィオルディリージとドラベッラの姉妹の美貌と貞節を自慢している。それを聞いた老哲学者ドン・アルフォンソは女性の貞節など信じてはいけないと言う。そこで三人は、芝居をして、姉妹の貞節について賭けることにした。

哲学者は、姉妹のもとに行き、彼女たちの恋人たちが戦地に行くことになったことを告げる。嘆き悲しむ姉妹。そして別れの五重唱。その後、哲学者がアルバニア人に変装したフェルランドとグリエルモを連れて、姉妹に紹介する。早速、二人は姉妹に愛を告げるが、相手にされない。次は、二人が薬びんを持って登場、姉妹の前で、服毒自殺のふりをして倒れ、接吻を求める。が、拒絶する姉妹。

＜第２幕＞

しかし女中が姉妹に男遊びをすすめるので、姉妹も少し楽しんでみようかという気分になる。ドラベッラは姉の婚約者グリエルモが変装している男に目をつけ、フィオルディリージは妹の婚約者フェルランドが変装している男にしようという。

まずはドラベッラがグリエルモに口説き落とされ、フィオルディリージもフェルランドの胸に抱かれる。そして、姉妹とアルバニア人たちとの結婚式が始まる。すると、遠くから軍隊の帰還を告げる合唱が聞こえる。男二人は引き下がり、変装をとって士官姿で姉妹の前に現れる。グリエルモはそこにあった結婚証明書を見つけて、怒り出す。姉妹は死んで不実を詫びようとする。しかし最後は、哲学者が、恋人たちに本当の愛を勉強させるための芝居であったことを明かす。　　[山田治生ほか『一冊でわかるオペラガイド 126 選』]

メスマーの石

デスピーナ：これがあの磁石のかけらです。**メスマーの石**で、始まったのはドイツで、そのあと大変有名になったのはフランスの地でした。
（磁石の一片で仮病人たちの頭に触り、彼らの体を上から下へと優しくさする）　[海老沢敏　訳]

第１幕後半　磁石の場面

フランツ・アントン・メスマー
(1734-1815)

医者。ウィーンで学び、同地で開業。1772 年頃“動物磁気”と彼の命名するある種の力が存在すると考え始める。これを発展させて作り上げたメスメリズム(動物磁気説)は、近代心理療法における催眠術の先駆。　　[世界人名辞典]

2．聴きどころ

三組の男女がシンメトリカルに配され、二重唱や三重唱、四重唱で組み立てられてゆく構成。もともと重唱の多いのがモーツァルトのオペラ・ブッファの特徴だが、『コシ・ファン・トゥッテ』はそれが極限に達している。独唱と重唱の比率は１２：１９となっている。

聴きどころ　①　「風は穏やかに　Soave sia il vento」
三重唱　第 1 幕第 10 番（フィオルディリージ、ドラベッラ、ドン・アルフォンソ）

ロココの優美の極みも、『コジ・ファン・トゥッテ』のもの。船出をする士官を見送る、フィオルディリージ、ドラベッラ、そしてドン・アルフォンソの小三重唱「風よ穏やかに」。波を描く弦の響きの上に、三人の声がきれいに重なり合う。ごく短く、しかも単純な、ホ長調アンダンテの歌だが、優しい美しさでいっぱい。

対訳：*風が穏やかにあり　波が静かにあり　そして自然の万物が慈愛にみち応えてくれるよう、*
わたしたちの願いに。

聴きどころ　②　「風にも嵐にも Come scoglio immoto resta」
独唱　第 1 幕第 14 番（フィオルディリージ）

フィオルディリージの一番の聴かせどころ。低声を使って始まり、強い意志を装飾的な技で示してゆく。

対訳：*岩が不動であるように、風や嵐にも、そのように常にこの心は堅固です、操もそして愛情も。*
こうした松明は私たちにはもともとありました、それが私たちを喜ばせ、慰めています、
ですからただ死のみにできましょう、この心に愛情を変えさせることは。・・・

聴きどころ　③「ぼくらの恋人からの愛のそよ風は Un'aura amorosa」
独唱　第 1 幕第 17 番（フェルランド）

実に甘く抒情的で、テノールの名歌というべきだろう。イ長調、アンダンテ・カンタービレのこの歌も、このオペラのロココの優美の代表例。

対訳：*僕たちの尊い宝の　愛の息吹は　甘い安らぎを　この心に与えてくれよう。*
この心に、この愛の希望に養われ　それ以上の糧など　必要としない心に。

聴きどころ　④「女は 15 にもなれば Una donna a quindici anni」
独唱　第 2 幕第 19 番（デスピーナ）

第 2 幕の冒頭を飾る、デスピーナの「女も十五になれば」。激烈にして軽快なアリア。

対訳：*女も 15 歳になれば　世の中のことはみな知らなければ、悪魔はどこにシッポがあるか、*
何がよくって何が悪いか。
恋人たちを夢中にさせる　手管も知らなければ、作り笑いも空涙もできなければ、
うまい言いわけも考え出せなければ。・・・

聴きどころ　⑤「私はあの栗色のほうがいいわ Prendero quel brunettino」
二重唱　第 2 幕第 20 番（フィオルディリージ、ドラベッラ）

姉妹がそれぞれ相手を品定めする二重唱。

対訳：*（ドラベッラ）わたしはあの黒髪をとることにしてよ、こっちのほうが面白そうなので。*
（フィオルディリージ）それならわたしは金髪とちょっと笑ったり、ふざけたりしてみたいわ。
（ドラベッラ）ちょっぴりお遊びで、あの方の甘い言葉に　わたし、応えることにしましょ。
・・・・・

聴きどころ　⑥「恋は小さな泥棒 E amore un ladroncello」
独唱　第 2 幕第 28 番（ドラベッラ）

積極的に生を楽しむドラベッラの本領は、第 2 幕後半のアリア。

対訳：*恋はちいちゃな悪戯っ子、恋はちいちゃな蛇。それで安らぎを奪ったり与えたり*
好みのままよ、人の心に。
瞳から胸のうちへと　通り道を開いていくとすぐ　人の心を鎖でつなぎ
そして自由を奪ってしまうの。
甘さと美味しさをもたらすわ、あなたが恋のなすままに任せれば、
でも苦味でいっぱいにしてよ、もし刃向かおうとすれば。
もし恋があなたの胸に入り込んで　もしあなたのここを突ついたら
すべて恋の命じる通りになさい、わたしもそうすることにしていてよ。

聴きどころ　⑦「間もなく私は許婚者の胸に抱かれるのだわ
Fra gli amplessi in pochi istanti」

二重唱　第 2 幕第 29 番（フィオルディリージ、フェルランド）

第 2 幕後半の、フィオルディリージがフェルランドに陥落するときの二重唱。テンポが変わり、一気に二人が接近してから情熱的な愛の二重唱になる。

対訳：*（フィオルディリージ）もう少しで抱擁のなかへ　真ある許婚の抱擁に行きつくのだわ、*
でもわたしと見分けられずにあの方の前へ　この服装で出るのよ。
ああ、どんなにか喜びをあの方の美しい心は　わたしと分かったら味わうことでしょう！
（フェルランド）その一方で悲しみのため　哀れにも僕は死ぬでしょう！
（フィオリディリージ）なんてこと！　見つけられてしまったわ！　どうか、出ていらして・・・
（フェルランド）ああ、いやだ、僕の命よ！
この剣で、あなたの手で　あなたがこの心臓を刺すのです、もしその力が、ああ、
あなたにないなら　僕があなたの手を支えましょう。　・・・

［『モーツァルト　オペラのすべて』］
［対訳　『オペラ対訳ライブラリー』小瀬村幸子訳］